

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：23804

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2017

課題番号：16H07114

研究課題名(和文) オンライン言語学習におけるタスク活動と第二言語習得の可能性

研究課題名(英文) Exploring Online Task-based Language Learning

研究代表者

高瀬 奈美 (Takase, Nami)

静岡文化芸術大学・公私立大学の部局等・特任講師

研究者番号：20705199

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究目的は、本研究の目的は、「同時型」と「非同時型」という種類の違うCMCにおいて、3種類の異なるタスクを実施し、対面活動と比較し、言語的特徴を明らかにしていくこと、異なるタスクを用いてCMCでの言語的活動が対面活動におけるスピーキングやライティング活動にどのように影響を与えるのかを検証することである。3種類のタスク(Interview, Narration, Decision Making)を利用して、チャットやフォーラムにおける産出言語の特徴を分析した。また、チャット利用によるスピーキングとライティングの学習効果とタスクタイプとの関係を事前事後のテストによって調査した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to (1) analyze how tasks using CMC (Computer - Mediated Communication) affect the language production, (2) investigate how the use of CMCs will improve face-to-face speaking and writing. Chat rooms and forums have been chosen for representing CMCs. Three types of tasks (Interview, Narration, and Decision Making) were used to analyze the output in chat rooms and forums. Pre- and post-design were applied to look for the effect on using tasks in CMC environment.

研究分野：CALL

キーワード：Task-based learning CMC

本研究は、CMC(Computer-Mediated Communication)のタスク活動上で、先行研究がとらえていない対面活動での影響についてである。チャットとフォーラム、対面活動に関して3種類のタスク(Interview, Narration, Decision Making)の産出言語の特徴を明らかにするとともに、チャットやフォーラムで、タスク活動が与える対面活動へのスピーキングやライティングの技術の向上との関係性を調査した。

1. 研究開始当初の背景

CMCには、「同時型 CMC」と「非同時型 CMC」があり、本研究は、「同時型 CMC」のチャット機能と「非同時型 CMC」のフォーラムを利用した言語学習が、対面学習に与える影響についての研究である。CMCに関する近年の研究では、対面活動と同様のコミュニケーション上の特徴がみられることが明らかになってきた。

CMCとスピーキングの発達

Beauvois (1997) や Payne & Whitney (2002)の研究では、CMCを使ったグループと使わなかったグループそれぞれに事前事後のスピーキングテストを行った。その結果、「同時型 CMC」を使ったグループではスピーキングテストのスコアが上がったことが分かった。Payne & Whitney (2002)は、「同時型 CMC」はスピーキングと同じ認知メカニズムが背景にあることをスピーキングの発達の理由とした。「非同時型 CMC」がスピーキングに及ぼす影響について、「同時型 CMC」と比べると差は少ないが、スピーキングへの到達に効果がでたという研究結果を発表した。

CMCとライティングの発達

CMCを利用した活動とライティングに関する研究では、ライティングのスキルを測る研究はあるものの、CMC活動とライティング活動を比較した研究はない。また、ライティングスキルの指標となる産出言語の正確性、産出言語量、言語的な正確性について、結果にばらつきがある。CMCは、正確性が劣る(Blake, 2000; Kelm, 1992; Kern, 1995; 1998; Lee, 2000 & 2002; Sotillo, 2000)とする研究結果がある一方で、語彙や構文の複雑性があり、活用することにより、文法の正確性や複雑性を促すとする研究結果(Chun, 1994; Pellettieri, 2000; Warschauer, 1996)もある。

研究結果に隔たりがあるのは、CMCは、話し言葉と書き言葉の両方の特徴も兼ね備えているからではないかと考える。スピーキングにみられる交渉パターンや談話指標などのコミュニケーション能力に関する研究(Smith, 2003; Lee, 2002)がされてきたが、大部分は文字でのやり取りであるため、書き言葉としての特徴を備えているという結果がある(Pellettieri, 2000; Salaberry, 2000)。

チャットと正確性の検証

高瀬(研究代表者)は、3種類の認知負荷

の違うタスク(Interview, Narration, Decision Making)をチャットと対面活動において比較しながら研究をしてきた(2014-2015)。その結果、チャット活動では、間違いに気付く時間があることなどから負荷の異なる3種類のタスクであっても対面活動と比べ、全体的に正確性が上がることがわかった。対面活動ではタスクの負荷が上がることによって帳尻効果の影響を受け、正確性が失われる(Foster & Skehan, 1996)が、オンラインチャットでは負荷があがっても、正確性に影響がないことを示唆していることがわかった。また、対面活動に比べ、チャット活動では母語に頼らない分、目標言語の産出活動に集中できるという結果が得られた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「同時型」と「非同時型」という種類の違うCMCにおいて、3種類の異なったタスクを実施し、対面活動と比較し、言語的特徴を明らかにしていくこと、異なるタスクを用いてCMCでの言語的活動が対面活動におけるスピーキングやライティング活動にどのように影響を与えるのかを検証することである。具体的には、3つの検証を通して、CMCを利用した言語活動とタスクの関係を3つの観点から分析した。

3つの検証

- (1)「非同時型 CMC」であるフォーラムと対面活動を比較した検証
- (2)CMS がオーラルコミュニケーションの発達の变化に及ぼす影響の検証
- (3)CMS がライティングの発達の变化に及ぼす影響の検証

3つの観点

- CMC内で使用されるタスク別の言語活動の特徴
- CMCを利用した言語活動におけるスピーキング活動への影響
 - CMCを利用した言語活動におけるライティング活動への影響

3. 研究の方法

CMCにおけるタスク活動のうち、スピーキングやライティングへの影響を解明するために必要な3種類の検証を行った。(1)「非同時型 CMC」であるフォーラムと対面活動を比較した研究(2)CMCがオーラルコミュニケーションの発達の变化に及ぼす影響を検証する研究、(3)CMCがライティングの発達の变化に及ぼす影響を検証する研究である。

(1)「非同時型 CMC」であるフォーラムと対面活動を比較した研究

「非同時型 CMC」であるフォーラムと対面活動を比較した検証を行うことによって、今までに得られた「同時型 CMC」のチャットとの

正確性、総語数、語彙の多様性、構文の複雑性の結果と比較し、「非同時型 CMC」の特徴を明らかにした。タスクタイプは、チャットと同様に 3 種類の認知構造の違うタスク (Interview, Narration, Decision Making) を実施した。

(2) CMC がオーラルコミュニケーションの発達の変化に及ぼす影響を検証する研究

CMC には文字のみ利用できるチャットを使用した。3 種類のタスク (Interview, Narration, Decision Making) タスクを実施し、事前事後ではどのようにスピーキングに変化がおこるのかを測定した。

(3) CMC がライティングの発達の変化に及ぼす影響を検証する研究

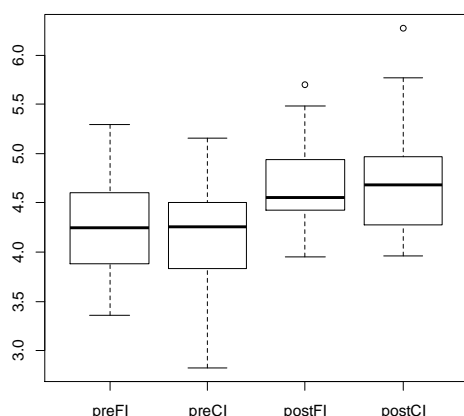
(2) と同様に CMC には文字のみのチャットを使用した。タスクには、(2) の結果を踏まえて 2 種類のタスク (Interview, Narration) を実施した。事前事後のライティングの変化を測定した。

4. 研究成果

主に得られた結果は 3 点である。

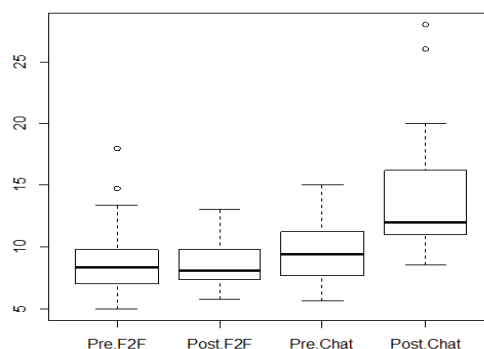
(1) フォーラムを利用した言語活動は、対面と比較して、産出言語は多いが三単現や名詞の複数形-s や冠詞(a, the)のミスに気づきにくい傾向がある。

(2) チャットを利用したがオーラルコミュニケーションの発達の変化に及ぼす影響の検証では、インタビュータスクを利用した場合、事後のスピーキングテストで語彙の多様さが対面グループよりも高い結果となった(図 1)。また、チャットグループはスピーキングの特徴として”I”や”my”など自分を示す表現が多用されていたことがわかった。



(図 1).インタビュータスクを利用した場合の事前事後スピーキングテストの語彙の多様性の変化

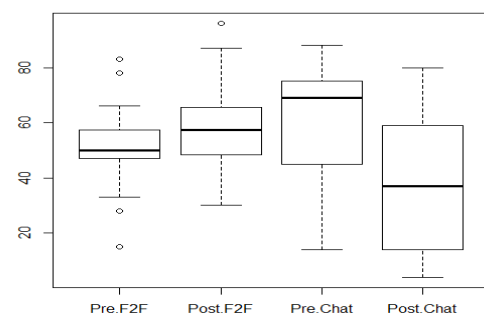
ナレーションタスクを利用した場合は、一文あたりの単語数が多くなったが(図 2)、総語数(図 3)と語彙の複雑性が減少した(図 4)。



Mode	n	Pre Test		n	Post Test		Pretest-Posttest comparison	
		M	SD		M	SD	p	d
F2F	27	8.926	2.849	28	9.667	1.778	0.926	0.310
Chat	19	9.667	2.661	21	14.127	5.177	0.002*	1.070

*p<.05

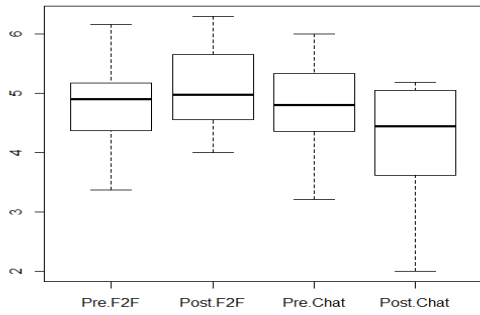
(図 2).ナレーションタスクを利用した場合の事前事後スピーキングテストの一文あたりの平均語数の変化



Mode	n	Pre Test		n	Post Test		Pretest-Posttest comparison	
		M	SD		M	SD	p	d
F2F	27	50.852	13.675	28	58.714	16.149	0.092	0.520
Chat	19	60.664	19.399	21	39.333	21.944	0.004*	1.030

*p<.05

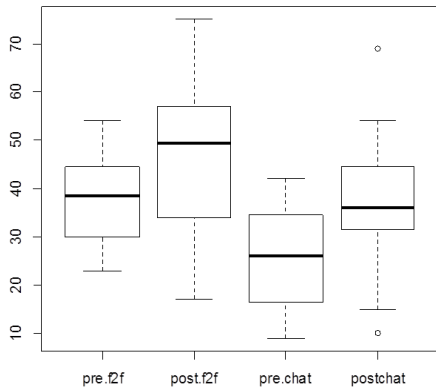
(図 3).ナレーションタスクを利用した場合の事前事後スピーキングテストの総語数の変化



Descriptive Statistics for GI in Essay Tests							
Mode	n	Pre Test		Post Test		Pretest-Posttest comparison	
		M	SD	M	SD	p	d
F2F	27	4.826	0.641	5.064	0.642	0.293	0.370
Chat	19	4.806	0.754	4.183	0.890	0.041*	0.740

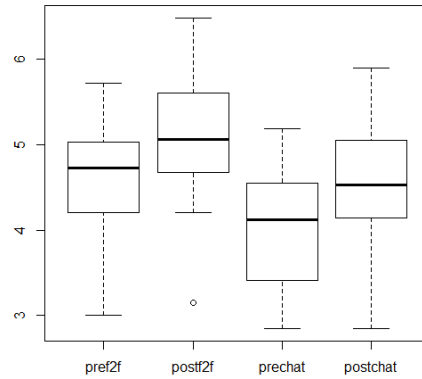
(図4). ナレーションタスクを利用した場合の事前事後スピーキングテストの語彙の多様性の変化

(3) ライティングの発達の変化に及ぼす影響の検証では、インタビュータスクでは、事後ライティングテストにおいて、チャットグループの総語数(図5)と語彙の多様さ(図6)は対面グループと同様に向上したが、T-Unit の平均語数は減少した(図7)。



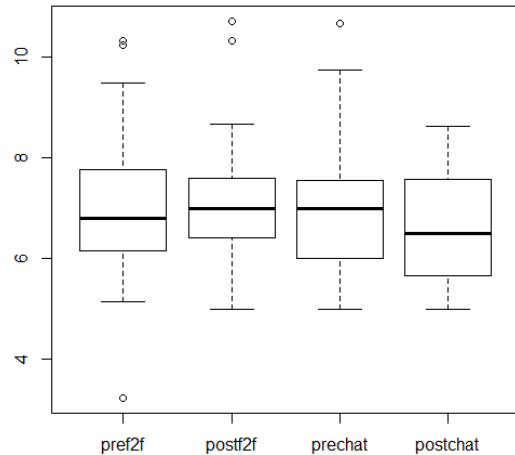
Descriptive Statistics for Token in Essay Tests							
Mode	n	Pre Test		Post Test		Pretest-Posttest comparison	
		M	SD	M	SD	p	d
F2F	20	36.500	10.543	46.450	15.246	0.056	0.759
Chat	15	25.470	10.825	38.000	14.232	0.010	0.960

(図5). インタビュータスクを利用した場合の事前事後ライティングテストの総語数の変化



Descriptive Statistics for GI in Essay Tests							
Mode	n	Pre Test		Post Test		Pretest-Posttest comparison	
		M	SD	M	SD	p	d
F2F	20	4.600	0.634	5.053	0.715	0.048	0.671
Chat	15	4.009	0.728	4.510	0.731	0.054	0.690

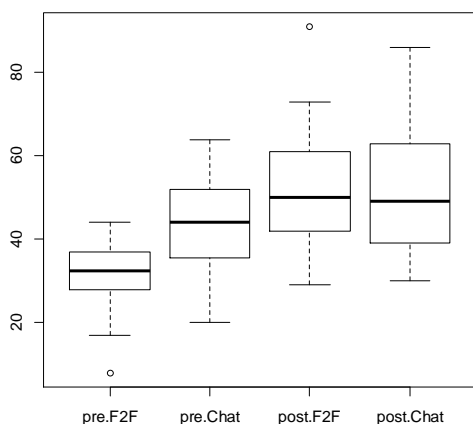
(図6). インタビュータスクを利用した場合の事前事後ライティングテストの語彙の多様性の変化



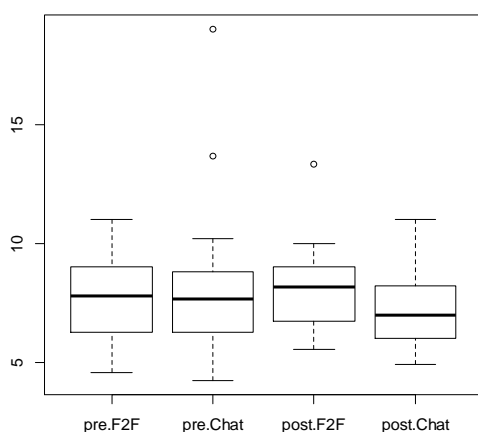
Descriptive Statistics for MLT in Essay Tests							
Mode	n	Pre Test		Post Test		Pretest-Posttest comparison	
		M	SD	M	SD	p	d
F2F	20	7.077	1.612	7.158	1.424	0.745	0.053
Chat	15	7.083	1.577	6.619	1.090	0.473	0.360

(図7). インタビュータスクを利用した場合の事前事後ライティングテストの T-Unit あたりの平均語数の変化

また、ナレーションタスク実施後では、チャットグループは、総語数(図8)と T-Unit あたりの平均語数の変化(図9)は対面グループと同様の变化であった。



(図8).ナレーションタスクを利用した場合の事前事後ライティングテストの総語数の変化



(図9).ナレーションタスクを利用した場合の事前事後ライティングテストの T-unit あたりの平均語数の変化

タスクと学習効果

チャットを利用した学習効果は、タスクに依存することが明らかになった。特にスピーキングの発達変化では、チャットを利用したインタビュータスクでは、語彙の多様性の変化から語彙への注意が高まる可能性が示唆された。また、ナレーションタスクを利用した場合は、チャット内でのタスク活動が要点をまとめ、複雑な構文を産出していることが推測できた。

一方、チャットを使用したライティングへの学習効果は、対面活動以上の効果を得ることができなかった。ライティングの向上につながる学習効果は、対面によるスピーキングでも得ることができなかった。特にインタビュータスクを利用した場合、事後ライティングでは、事前ライティングよりも短い構文が多くなった。これは、チャット内での短い文でのやり取りが影響したと考えられる。

今後の展望

本研究では、CMCの種類(同時型と非同時型)、タスクの種類(Interview, Narration, Decision Making)、スピーキングとライティング技への効果を検証した。効果的な学習には、CMCの種類とタスクの使い分けが重要であることが明らかになった。今後は、本研究の成果を踏まえて、効果的なCMCとタスクの組み合わせによる、具体的な学習効果を対面学習と比較することによって言語習得の研究が進むことを期待する。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

Nami Takase, Foreign Language Output and Tasks in Synchronous Computer-Mediated-Communication, The 2016 JALT Pan Sig Journal, 査読有り, 2017.11, p.305-312

〔学会発表〕(計 5 件)

Nami Takase, L2 Performance in Text Chats 全国語学教育学会 PanSIG2016, 沖縄、2016年5月

Nami Takase, How is doing online activities different from performing tasks face-to-face? -A comparative linguistic analysis of these activities in essay writing using discussion forums, Education and Development Conference (Bangkok, Thailand) 2017年3月

Nami Takase, How Chatting Online Could Affect Speaking, 全国語学教育学会 PanSIG2017 学会(秋田), 2017年5月

Nami Takase & Marcus Springer, How Online Cultural and Language Exchange Affects Language Acquisition, JALT National Conference 2017 (Tsukuba), 2017年11月

Nami Takase, Online Activities and Language Learning, JALT Hamamatsu, 2017年12月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高瀬 奈美 (TAKASE, Nami)

静岡文化芸術大学・英語・中国語教育センター・特任講師

研究者番号: 20705199